第八回育英生入選論文

未来社会の仏教と私

東洋大学文学部印度哲学科二年　李　焌　秀
（韓国・継続）

私が未来の韓国仏教界の一員として必ずやりたいことがあるとしたら、それは釈尊の仏教を世界に広く知らすことである。

韓半島に仏教が入って来て、一六二〇年間仏教は韓民族の歴史・文化・思想・宗教の根拠となって、民族史観の主流を形成して来た。一六二〇年の韓国仏教史において学僧として最も偉大な方は新羅時代の元暁（ウオンヒョウ）大師（六一八―六八六年）と義湘（イサン）大師（六二五―七〇二年）のお二人であった。

元暁大師は新羅仏教史のみならず、中国仏教史においても、その傑出した業績に関して卓越した存在であった。皇龍寺に得度し、修学に専心したが、後、高句麗僧普徳について『涅槃経』などを学び、常に諸方をめぐって研鑽を怠らなかった。

六五〇年、学なった元暁は普徳門下の同門義湘と入唐を試みたが、途中「三界唯心・万法唯

識・心外無法」の哲理を悟って義湘と別れ、踵を回すと生涯二度と故国を離れようとはしなかった。是は真理の普遍性と独自性を根拠として求法仏教の時代から自らの身内証に依拠して立つ韓国仏教確立の時代を示す一挿話として意味が深い。元曉の著作は、総じて五十七部二百三十巻の存在が確かめられているが、外にも八十一部説、九十九部説、二百四十余部説などがある。とにかく、元曉は世界仏教史に一番多くの論書を残した。

元曉の代表的著書としては、『金剛三昧経論』・『十門和諍論』・『大乗起信論疏』・『華厳経疏』・『法華経宗要』などがある。特に『起信論疏』などの諸疏は『海東疏』として中国本土でも非常に尊重され、中国華厳宗の四祖であった清涼澄観の思想的根拠ともなった。元曉の思想は多技にわたり複雑であるが、簡単にその思想的根幹を述べるならば、起信論的如来蔵思想や

仏性論によりどころを置いた華厳教学であったと思われる。『十門和諍論』はそれまでの教学を大成し、新たに新羅仏教学を樹立しようとするものであったから、元曉はいわば韓国における八宗の祖ともいうべき位置にある。『十門和諍論』は仏法全体を「和」という一つの理念で解釈した名著であり、世界平和をめざす仏教的理念を高らかに論じている。

ドイツのカントは、『永遠の平和のために』という著書を残しているが、それは理想的に『十門和諍論』と類似している。元曉とカントの思想による世界平和の理念を確立するとしたらすばらしい結果が生まれるであろう。それゆえ、私は元曉とカントの比較研究をやりたいと思い、指導教授（東洋大学の）金岡秀友先生に自分の意思を伝えたところ、先生は「仏教と西洋哲学を比較するのはあまりよくない。そして、比較思想は君が将来大家となってやった方がいい」とご教示くださったので、将来には必ずやってみたいという強い信念を心の中に持っている。

義湘大師は新羅の王族金韓信の息子であったが、二十歳で京師の皇福寺に出家得度した。後に元曉とともに入唐の志を抱き留学の途についた。元曉が万法唯識の悟境を得て踵を返すや一人でそのまま唐へ入った。入唐し、終南山至相寺の智儼（華厳宗三祖）に学んで華厳教学の蘊奥を極めた。現在する『華厳一乗法界図』は、義湘が智儼に示して印可された法性偈であり、七言三十句二一〇字五四曲をもって、華厳教学の奥旨である海印三昧を表現したものである。智儼は義湘が義持に秀でるを賞し、義持の号を義湘に与えたと伝えられる。智儼の入寂後、講主の継承を慫慂されたが、時あたかも新羅統三の時にあたって、新羅・唐は対立しており、義湘は唐が新羅攻略の準備に急いである情勢を伝

えるため急拠指南の地位を同学の賢首大師法蔵に譲って、文武王十一（六七一）年帰国した。義湘の帰国後、法蔵は華厳宗の三祖となって、華厳宗史において一番偉い人物として天台宗の開祖である天台智者大師とともに中国仏教学の双璧となった。私は華厳学の分野では義湘と元暁がいたので中国より新羅の方がより水準が高いのではないかと思い、天台学の分野では天台智者大師がいたので新羅より中国の方がより水準が高いのではないかと思う。元暁が「和」という一つの理念で仏法全体を解釈したように、天台は『華厳経』を諸経中の最高の権威であると結論し、「妙」・「法」・「蓮」・「華」・「経」の五つの文字で仏法全体を解釈したあの有名な『法華経義』・『法華文句』・『摩訶止観』を著わした。天台のその哲学的な深い世界はだれもついて行くことが出来ないほど非常にすぐれていた。天台と法蔵を中国仏教学の双璧と見る見解もあるが、インドの仏教を最初に中国化させた人物が天台であったので、彼は中国仏教学の先駆的業績を築いたと称されるのである。

義湘は帰国後、太白山に浮石寺を創建し、三千人の弟子に『華厳経』を講じ、『入法界品鈔記』・『華厳十門看法記』・『阿弥陀経義記』などを著したが、その教学の深広比類ないことは智儼門下において証された通りであり、法蔵も『華厳経探玄記』を著わして義湘に贈り批判を講じたという。義湘は「海東華厳宗」の祖として浮石寺を本山と定めた。

義湘は唐に留学して大成した。元暁は新羅を離れることなく新羅において大成し、驚くべきことに中国本土で非常に尊重された。天台学と華厳学がインドの仏教哲学を超克した中国人独自の思想体系であるといわれるのに対して、元暁の『十門和諍論』（和諍思想）は中国人を超克した韓国人の独自的な思想体系であるといわれ

る。

私は元曉と義湘の後裔として海東の沙門の一人として存在しているということにいつも強い矜持を持っている。将来釈尊の法を継いで釈尊の偉大な思想を世界に広く知らせて最も誠実な修行者としての道をひるまず行きたいと決心している。

不動明王の大祭並びに大般若会法要を厳修

五月二十八日(木)午前十一時より善光寺恒例の身代り不動明王の大祭並びに大般若会法要が厳修されました。佐藤俊明老師を大導師に、家内安全、身体健全、商売繁昌、交通安全、その他の御祈願会、祈禱会がとり行われ、また講演に獅子てんや先生をお招きし、参加者一同に感銘を与えました。